

# 京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要

## 2019

### <論文>

- ヤシュチランの鳥ジャガー大王の政敵  
..... 金子 明 1
- メキシコにおける「慣習」による先住民行政区選挙  
..... 小林 致 広 25

### <研究ノート>

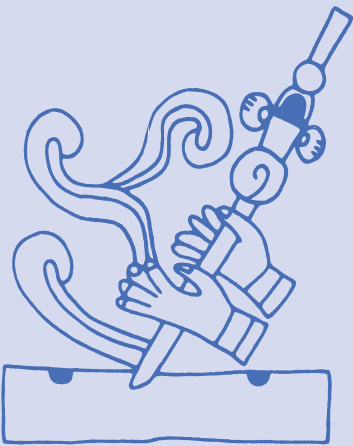
- 戦前日本におけるラテンアメリカ研究（I）  
—江戸期・明治期・大正期における先行研究を中心にして—  
..... 辻 豊 治 49

### <書評>

- 井村俊義著『チカーノとは何か—境界線の詩学』  
..... 牛 島 万 65

### <史料紹介>

- フランシスコ・ハビエル・アレグレ著『ヌエバ・エスパーニャのイエズス会管区史』  
..... 桜 井 三 枝 子 69



〈書 評〉

井村俊義著『チカーノとは何か—境界線の詩学』  
(水声社 2019年 233頁)

牛 島 万\*

井村俊義氏は、英米文学者であるが、長らくチカーノを中心に、その文学および民俗学や哲学、批評分野まで幅広く手掛けてきた、いわゆる日本のなかのチカーノ研究を代表する論客の一人だ。これまでボーダーランズの中へ自らの身体を置いて体験、体感してきた、文献調査を越えた生の「声」を知るという姿勢こそ、著者が自負するところの文化人類学者の姿勢そのものであろう。加えて、アメリカ研究にとどまらず、メキシコ史やその文化、思想に対する造詣も深い。この度、記念すべき本書は、これまで氏が発表されてきた短編の論文をまとめられたものである。目次は、以下のようになっている。

まえがき

- I 境界線を溶かす言葉の力——イラン・スタバンス
- II ロードという境界線——サルバドール・プラセンシア
- III 境界線を越えゆく亡霊たち——英雄、風景、死の共同体
- IV 日本とメキシコの境界線——サウスウエストへの旅
- V 近代化に抗するテキスト——アントニオ・プルシアーガ
- VI 境界線の再魔術化——ギジェルモ・ゴメス＝ペーニャ
- VII 境界線の詩学——アルフレッド・アルテアーガ
- VIII 事実と虚構の境界線——ホワイトネスと混血
- IX ボーダーランズの構築——アメリカスと不法移民
- X <沈黙に宿る風景> <アーバン・ドライブ宣言>

註

あとがき

初出一覧

以下、各章の要点をまとめてみたい。

第1章では、チカーノとは何か、という問いに対して、チカーノは、「メキシコ系アメリカ人」、「チョロ」、「ズート・スター」「パト」などの呼称では不十分であり、ずれがあるとする。従って、「言葉は現実を描写するには不完全なものであり、そしてまた現実を描写するには不完全なのである」。そこで、筆者が着目した点は、「両者の結節点としての身体のもつ可能性を私たちは読みとる必要がある」とする(19頁)。その例として、身体性としてのタトゥーを挙げている。そこには、「古代から近未来までのメキシコに関するさまざまな表象」が、身体に「重層的に混在」(＝共同性)するように刻まれているのである。その典型的なものの一つに、「グアダルupesの聖母」

---

\* 京都外国語大学

像があるが、これはチカーノの心の拠り所となる代表的な精神的表象である。またアストラノという彼らの「イマジナリーな空間」は、「帰るべき場所」として、とくに精神面の支柱になると考えられる。そして、筆者は、このような動きが、いわゆる近代国民国家の歴史過程において異を唱えて構築された、いわゆる米墨の境界を超越する行為であり、同時に自分の身体の中に無理やり引かれた「境界」を克服することを意味すると述べる。そこで、国家言語の統一性に逆らい、自らの「アイデンティティを担保している言語」を用いることで、「近代的な数々の束縛」からの解放に努めてきた。筆者が特に着目しているのが、チカーノの再生産という論理である。つまり、米墨戦争（1846～48年）による国境画定以降、幾多の時代を経て、メキシコから米国へ越境してきたメキシコ人も、また逆に米国からメキシコにUターンするメキシコ人も、すべてチカーノとして再生されてきた、という。チカーノは所与のものではなく増殖されるもの、またそれゆえに、「人種や国籍にかかわらず、人は誰でもチカーノになる可能性をもっている」（23頁）と述べている。

第2章では、ロード（道）に着目している。筆者は、ロードとは「異文化および異界への通路」と定義している。異文化との衝突が不可避であることから、想像力が必要となるという（35頁）。また、「現代において、ロードが運ぶ人びとの『感情』とそれが織りなす『歴史』の飛躍的な増加によって、ロード自体があたかもひとつの共同体を構成している」とも述べている。従って、「コミュニティとロードとの境界線はますます薄れてきている」とする。現代において、かつての故郷は、現実に見える「風景」とは異なる。だからこそ、目の前に見える「物質」から、「記憶」と「想像力」を働かせて、得られる心象こそが、帰るべき場所としてのトポスであるとする（45頁）。

第3章では、亡霊という概念がここで用いられている。「亡霊とは、宗教や貨幣やイデオロギーのメタ概念」である。「亡霊は、実態とは無縁である」（56頁）。ここでは、マニフェスト・デスティニー、マリントチェ、グアダルーベの聖母、ホアキン・ムリエタ、さらにメスティーツも、存在自体が明らかではない概念は、すべて亡霊であると述べる（59頁）。また、亡霊は、「国家言語に回収されない言語」、換言すれば、「翻訳されない余剰の言葉が映し出す幻影」である、と述べる。

第4章では、米墨の現在の境界線は、1846年の米墨戦争の帰結である。しかし、これ以外に、可視化されない無数の境界線が存在している。国民国家のなかで、あまり意識されなかった境界も、グローバリゼーションの影響下で、重層的で複雑な境界線が浮き彫りにされてきている。そのなかで、「薄黒色の境界線」とは、排他的で「面積をもたない、『理念としての近代的な境界線』ではなく、それ自体が面積をもつ『境域』であるとともに、他の境界線と重なり合う境界線」でもあるとする（81頁）。このことを、著者は米墨戦争と日米戦争の、両方の戦争体験を手がかりにして論じている。戦争によって新たな線が引かれ、国の内なる世界に新たな線引きをした。日系強制収容所がそうである。このような戦争体験による境界線が線ではなく、面（境域）であるからこそ、日系強制収容所とズート・スーツ事件を通じて、「薄黒色の境界線」による接点を通じて共感できたのだと考える。

第5章では、米墨境界が白人による非白人に対する排他的な境界であり、「認識上の境界線」（103頁）であるという特徴を持っている。その境界の論理に抵抗してきた非白人たちが「異なるパラダイム」を構築しない限り、この枠組みの中で反対しても解決はつかない。そこで、筆者は、ボーダーランズと境域は異なると主張する。「ボーダーランズは境界線が生み出した事後的なクレオール状況で物理的概念であるが、境域は、面積をもたないとされる線分上に想定されるトポス」で

あると考える」(105頁)。そして、このことが、国家原理に基づく単純な外部からの区分によるアイデンティティ把握に対しての再考の機会を与えてくれる。「アメリカという『他者』の土地に堆積している地層の奥深くに自らと関係する物語や英雄を見つけ出すような歴史感覚はメキシコに由来するもの」であり、「個体を非人称の連続体へなかへと解体」していくことで、「伝説や英雄や偶像は時空間を越えて人びとを結びつける」のである(117頁)。例えば、南から北へ越境してきたチカーノは自己の体験を通じて、死生観がメキシコ人と異なる。だから、死者の声は、過去の「歴史」であるが、同性代の生者にも響くものである。そしてこれを表現するために、多様な言語(英語、スペイン語、ナワトル語、カロー[チカーノ・スラング])を用いて、同一平面上に使用することで、チカーノの身体を横切る様々な時空間を表現できるのである(119頁)。

第6章では、「国民国家の境界線を無化する実験場」として、ゴメス＝ペーニャはタトゥーとスパングリッシュを用いる。「身体自体に土地や名称などの記号を書き込むことによってアイデンティティは異なる位相で意味をもち始める」(139頁)のである。タトゥーは非欧米社会において、もともと文化に組み込まれていたが、欧米社会ではその歴史は浅く、むしろ非欧米人のタトゥーはその影響を受けている(222頁)。他方、スパングリッシュとは英語とスペイン語の単純な併用ではなかった。「国家言語の境界線を無化」し、「両言語がぶつかりあうボーダーランズ」においては、「国家言語が抱える欺瞞を顕現化」させ、「国家言語とは異なる地平にあり、統一的な言語体系を志向しない」スパングリッシュは、「国民国家成立以前の言語に近づく」のである。スパングリッシュとは混淆言語で、翻訳不可能で部分こそ、「部分的に排除」されることを意味している、と述べる。

第7章では、「異界への通路」には「想像力」が必要である。彼らの詩作では、ディフラシスモというアステカ詩人の用いた技巧を活用する。たとえば、「境界線、半分は水、半分は金属」とは、米墨国境が、東半分がリオグランデ境界、西半分が米墨戦争の結果による米国の力の論理で生まれた境界線を意味している。そして、ハチドリのように、「さえずり」「はばたく」ことによって、チカーノ詩人たちは異界を感じ取ろうとしたのである。

第8章では、虚構と事実の境界をつくらず、偶然性や空気が醸成する歴史を視野にいれても自らの「歴史」を創生する(177頁)。したがって、民族概念における虚構性と混血性による操作性(178頁)が必要となる。だから「事実」たる神話が生まれるのである。

第9章では、ボーダーランズの歴史とは、「人びとのあいだに壁を築くことでアイデンティティを生み出し、闘争と調停のなかで共生するのではなく、壁を作ることなしにコミュニティを併存させる方法」を考えなければならない。チカーノの表現方法は、時空を乗り越えて、「同じ環境にある人びとを結びつける」。つまり、「同じ平面上に混在している」かれらの歴史の蓄積である(192頁)。このような「国境地帯から発信される豊穡なテキスト」を読むには「想像力」が必要とされる(198頁)。

第10章では、「これまでの地域や人種概念を基盤にしたイデオロギーとは異なる原理が想定しようとする『部族』」こそ、アーバン・トライブであると筆者は主張する。これこそが、筆者が述べてきたチカーノやボーダーランズの「亡霊」である。辺境地帯のエル・パソとシウダー・フアレスを結びつけ一体化させているものこそ、この部族意識であり、彼らの再魔術化である。

以上が、各章の概要である。本書がこれまで書かれた短編を集めたものを基にしているので、どうしても多少の内容の重複が見られるが、このことは何ら本書の価値に影響を与えるものでは

ない。昨今、日本でも、チカーノが世の中では少しずつアウトロー文化としてポピュラー・カルチャーになりつつあるようだが、その背景や根源にあるチカーノの神髄を本書から学び、再確認できたことは極めて有益であった。従来、米墨関係やボーダーランズの研究は、日本におけるアメリカやラテンアメリカ研究者から取り残されてきた研究領域であった。アメリカ文学専攻出身の氏による功績は、われわれラテンアメリカ研究を志す研究者にとっても大いなる刺激となった。チカーノとは、国家の論理、あるいはグローバリゼーションに対抗するボーダーランズの主体者たるイメージ、つまり境界線上の人々のイメージで見られるのがつねであったが、そうではなく、アメリカとメキシコ、あるいはアメリカとラテンアメリカという「境界線」を超越し両方を往来でき（氏によると、それが「境域」である）、あるいは歴史的時系列を超越し、ある意味、過去を背負いつつも未来志向型の今日的人間像であることが、本書を通じてよく理解できた。残された課題は、本書が提起するチカーノの神髄が、グローバリゼーションの影響を極めて受けている現代において、どこまでそれを体現できるのか、という関心に尽きるかと思う。チカーノ精神なるものが、反グローバリゼーションとしての効力を持ち、別の政治的ベクトルとして対抗して働くのか、あるいは、自称および他称の「チカーノ」が、それぞれの身分や立場から、グローバリゼーション下の社会の中で、物質的に満たされない場合の「精神的」な宿りとして、換言すれば、グローバリゼーションの時世を生き抜いていく精神的指針にならんとしているのか、については、まさに混迷するラテンアメリカ地域の今日的現状に対する本書評執筆者の関心もあって、検討の余地があると思う。



# BOLETÍN del

Instituto de Estudios Latinoamericanos  
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Instituto de Estudos Latino-Americanos  
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

## 2019

### <ARTÍCULOS>

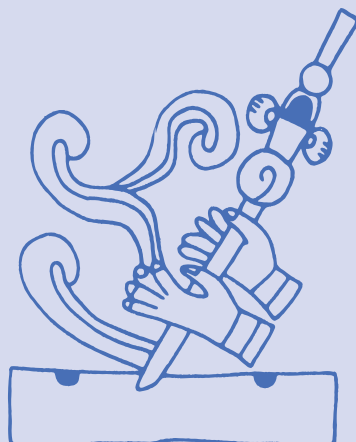
- Rival político de Pájaro Jaguar el Grande de Yaxchilán  
..... Akira KANEKO 1
- Elecciones de las autoridades por usos y costumbres en los municipios  
indígenas de México  
..... Munehiro KOBAYASHI 25

### <ESTUDIO PRELIMINAR>

- Estudios latinoamericanos en Japón antes de la Segunda Guerra Mundial ( I )  
..... Toyoharu TSUJI 49

### <RESEÑAS DE LIBROS>

- ¿Qué es un chicano?: *poética de las fronteras*, por Toshiyoshi Imura  
..... Takashi USHIJIMA 65
- Francisco Javier Alegre, *Historia de la Provincia de la Compañía de Jesús de Nueva España*, 4 vols., edición de Ernest J. Burrus y Felix Zubillaga, Roma, Institutum Historicum Societatis Jesu, 1956  
..... Mieko SAKURAI 69



Vol.

# 19